

# インドネシア・バリにおける言語使用



海外交流

原 真由子\*

Language use in Balinese society in Indonesia  
Key Words : Balinese, Indonesian, Bilingualism

## はじめに

インドネシアは東南アジアに位置し、約 189 万平方キロメートルの面積をもつ広大な島嶼国である。赤道にそって東西に広がる、ほぼアメリカの西海岸から東海岸までの距離に相当するおよそ 5,000 キロメートルに渡る群島には約 13,000 の島々が存在する。人口は約 2 億 7 千万人、世界 5 位の多さである。インドネシアは「多様性の中の統一」を国是の一つとしているように、インドネシア全体の国民文化を有しつつ、広大な領土に異なる多様な民族文化が存在する。そのため、比較的均質である日本にくらべると、地域や民族によって、これが同じ国なのかと思うほど、食事、生活習慣、文化、社会、信仰などあらゆる点において違いが大きい。言語も同様に多様であり、全国的に普及している国語であり、かつ共通語でもあるインドネシア語がある一方で、地域や民族によって異なる固有の言語（地方語と呼ばれている）が話されており、700 程度はあると言われている。

このような多言語社会インドネシアの中で、私は約 390 万人の人口を持つ一地方であるバリを対象にどのような特徴をもつ言語がどのように社会で用いられているのかということを明らかにするために調査を行ってきた。インドネシアは、宗教から見るとイスラム教徒が 9 割近くを占め、イスラム教徒

が世界で最も多い国であるが、その中でバリはヒンドゥー教徒が大多数を占める地域である。バリの人々の生活に息づいた信仰と儀礼、それに伴うデザイン・色彩とも華やかで意匠をこらした大小のお供え物やガムラン音楽、舞踊などは観光客を惹きつける魅力にもなっている。本稿では、そのようなバリにおける言語使用について簡単ではあるが紹介する。

## バリ語とインドネシア語の二言語使用

先ほど述べたインドネシアで用いられている 700 程度の言語の一つがバリ語である。バリ語は大多数のバリ人にとって母語であり、日常的に使用されている。一方で、バリ人は、バリ語の他に、国語であるインドネシア語を主に学校教育を通して習得し、バリ語とインドネシア語の二言語話者である。インドネシア語とバリ語は系統的には近いものの、全く別の言語である。そのため、インドネシア語しかわからない人とバリ語しかわからない人が会話をしても意思疎通ができない。その二言語は、場や状況によって、どちらの言語が使われるかがおおよそ決まっている。家族や友達と日常的な話題について話す時などの私的な状況ではバリ語が使われる。日々行われる様々な儀礼や慣習的な地域組織の会合など、バリ特有の慣習的な文脈においてもバリ語が用いられる。それに対して、学校で授業を受けたり、役所や会社で業務を行うといった公的な状況ではインドネシア語が用いられる。バリ人以外のインドネシア人と話すときもインドネシア語が選ばれる。また、バリに限らないが、学校教育で用いる教科書、法律文書や書類もインドネシア語で書かれている。その他の新聞・雑誌、小説などの出版物、テレビ・ラジオなどもほぼインドネシア語である。



\* Mayuko HARA

東京外国語大学大学院 地域文化研究科  
博士後期課程単位取得満期退学  
(2004年)  
現在、大阪大学大学院 言語文化研究科  
言語社会専攻 教授 博士(学術)  
E-mail : haramayu@lang.osaka-u.ac.jp

## バリ語とインドネシア語のコード混在

このように大まかにバリ語とインドネシア語の使い分けが決まっているが、二言語が混ざることもよくある。私的な場であっても、例えば話題が政治、ビジネス、専門的な内容となると、バリ語からインドネシア語に切り替わったり、インドネシア語とバリ語が混ざったりするコード切り替え(コード混在)の現象が見られる。逆に、役所など公的な場であっても、ちょっとリラックスして冗談を言う時など、インドネシア語からバリ語への切り替えや混在が起こることもある。

コード切り替え(混在)の背景には、例にあげた話題・内容、会話のモード(リラックスしているかなど)の変化だけでなく、バリ語とインドネシア語の言語構造の違いも影響している。その違いの一つに、バリ語は日本語のように敬語体系があるが、インドネシア語にはそれがないということがあげられる。

バリ語の敬語使用を決める主な要因は、出自(カースト)である。バリには、ヒンドゥー教とともに出自による社会階層であるカーストがもたらされ、現在でもバリ人の身分の決定に密接に結びついている。カーストは、ブラフmana、サトリア、ウェシア、スードラの4つに分かれている。ヒンドゥー教の最高司祭はブラフmanaの出身でなくてはならないということを除けば、カーストは特定の職業と結びついておらず、インドのようなカーストによる分業は見られない。ただし、ブラフmana、サトリア、ウェシアは貴族層、スードラは平民層と呼ばれ区別されている。平民層の者は貴族層をより上位であるとみなし、彼らに敬語を使い、それに対して、伝統的には貴族層の側は普通語を用いる。平民層と貴族層の間では、このようなカーストに基づいた非対称的な敬語使用がなされるのが規範とされていた。しかし、現在ではカーストだけでなく、職業や役職といった新しい社会階層も考慮し、カーストの差があっても平民層の側だけでなく互いに敬語を用いるのが一般的になっている。また、親しい関係であれば、カースト差があっても互いに普通語を用いる。

そのようなバリ語の敬語使用の変化が見られているが、バリ語会話の中でさらに敬語をもたないインドネシア語を用いることが、話者間の距離を調整したり、その距離を明示することを避けたりといった

役割を果たしているようである。インドネシア語にはバリ語のような敬語体系はないが、バリ語の中で新たな敬語的な役割を担っていると言えるかもしれない。また、日本語もそうであるが、敬語はいい大人になっても正しい運用は難しいものであり、バリ語の敬語に自信がないときはインドネシア語に切り替えたり、わからない表現のところだけインドネシア語を使って敬語の間違ひの可能性を避けることもある。

## インドネシア語使用の増加

先ほど述べたように、大多数のバリ人はバリ語を母語とするインドネシア語との二言語話者であるが、昨今、バリの州都であるデンパサールをはじめとする都市部の若年層は、バリ語能力の低下が顕著となっている。バリ語をあまり話すことができない、あるいは聞いて理解はできるが話すことのできない“不完全な”インドネシア語との二言語話者や、さらにはバリ語をほぼ話すことができずインドネシア語のみを用いる単一言語話者が増えている。公的な場だけでなく私的な場である家庭や友人間でもインドネシア語を使うようになっており、田舎に住む祖父母が町に住む孫にバリ語で話しかけると、インドネシア語が返ってくるということが起きる。親の中には、インドネシア語の能力の高さが進学や就職に有利だと考え、子供にはバリ語で話しかけないという人もいる。このように、都市ではバリ語の敬語どころか普通語さえほとんど話さない若者が増えている。

## バリ語の育成

このようなバリ社会におけるインドネシア語の普及や都市部の若者によるインドネシア語優勢の言語使用の実態はあるものの、バリ人と話していると、依然としてバリ語はバリ文化の一部として誇らしいものであり、バリ人たるものはバリ語をうまく話すことが当然であると考えていることが強く感じられる。バリ語には現在ローマ字による正書法があるが、もともと南インドのパラワ文字を源とするバリ文字があり、ロンタールという貝葉文書に様々なジャンルの文章が書かれてきたという伝統がある。法的にも、インドネシアの憲法においては国語であるインドネシア語だけでなく、バリ語のような地方語も尊

重し、保護することが定められ、その方策の1つとして、バリ州ではバリ語が地方語という科目で小・中・高校で教えられている。その他にも、例えば、2月には「バリ語月間」があり、その間にバリ文字コンテスト、バリ語関係のワークショップや講演会など、バリ語使用の促進のための施策が実践されている。また、インドネシア語を用いるのがほとんどであるマスメディアにおいてもバリ語が用いられる機会はそれほど珍しいものではない。バリで放映されるテレビやラジオの番組で、ニュースがバリ語で読まれたり、バリ語による司会進行、バリ語のコマーシャルもある。また、地元紙や雑誌でバリ語で書かれた記事が掲載されたり、本屋に行くとバリ語で書かれた詩、小説などの文芸作品の出版物も若干で

あるが見られる。

### おわりに

以上バリの言語使用の一端を紹介したが、インドネシア語と地方語の二言語話者が多数を占め、地方語にくらべてインドネシア語が優勢な二言語話者あるいはインドネシア語の単一言語話者の増加が認められるという状況は、バリだけでなく、インドネシア全国に見られる共通した現象である。その背景には、インドネシア語の教育と普及の全国的な広がり、マスメディアの普及、インドネシア語がもつ威信などが考えられる。これらは言語と方言の違いはあるが、日本でも標準語と方言の関係に同じようなことが言えるだろう。



バリの儀礼の一コマ：神々への供物を頭の上ののせている